

大動揺—文化盗用の政治—グローバル資本主義時代にあっては、他者の生活への想像力は大切な連帯の表現である

ブライアン・モートン著、脇浜義明訳

出典：Dissent, 2020年秋号

私が初めて「自分の車線から出るな」（出しゃばるな）という語句を耳にしたのは数年前、教えていた作文教室の中であった。受講生の一人であるアジア系アメリカ人の学生がアフリカ系アメリカ人の家族を題材に書いた創作を合評していたときであった。黒人の生活に関する決まり文句が矢鱈と多く使用されているなど、多くの批判があった。こういう批判でこの小説がずっと良くなるものと、私は期待していた。しかし、書き手に対して、そもそもこんな小説を書くこと自体が間違いだという意見が出るとは思ってなかった。そういう意見を言った人々の一人によると、社会的比較的恵まれた位置の人間が社会的に差別されているグループに関する小説を書くのは一種の文化盗用であって、害をなす、というのだ。

1～2カ月に一度は文化盗用がニュースになっている。ポートランドの二人の女性がメキシコ旅行でメキシコ料理を楽しんで帰国、メキシコ料理のブリトを販売する屋台を開いた。とたんにネットで袋叩きにされ、数か月で店を閉めた。カナダの大学でヨガ教室が開設されたが、学生たちの文化盗用抗議で閉じられた。ヤングアダルト小説を書いた著者が自分の経験外の世界の人物について書いたことを批判され、謝罪し、出版した本を回収した。このような様々な行為が文化盗用とされているので、いったい何が文化盗用なのか正確に規定することが難しい。

文化盗用に関する文献の多くは、この点に関して、まったく役に立たない。ウィリアムズ大学のアフリカ研究教授のレロンダ S. マンゴー＝ブライアントはこの語句を「他者の文化 — 知的財産、芸術品、文体、芸術形式等々 — を許可なく取り込むこと」と説明している。同じように、フォーダム大学の法学教授で、『誰が文化を所有するか？米国法における盗用と真正』（*Who Owns Culture? Appropriation and Authenticity in American Law*）の著者のスーザン・スカフィーデイは文化盗用を「他者の文化から知的財産、伝統的知識、文化的表現、工芸品などを許可なく使用すること。他文化に属するダンス、衣服、音楽、民間伝承、料理、伝統薬、宗教的シンボルなどの無許可使用も含む」と規定している。

こういう定義は一見もっともらしく見えるが、よく考えるとまったく辻褃が合わないことが分かる。外国語の勉強までも文化盗用になるのか、この定義でははっきりしない。それに、「許可」というが、いったい具体的には何を意味するのか。

他者グループの文化的表現の借用許可はどのようにして得るのだろうか。民族、ジェンダー、その他のアイデンティティ・グループには許可を出す代表部なんかない。小説家が自分が直接経験しない世界に関する作品を書いた場合、出版社はたいてい「センシティブテ

イ・リーダー」(sensitivity readers)<sup>1</sup>に差別や侮辱に繋がる言葉がないかを点検させるが、いったん出版されると、作者が自分で処理しなければならない。彼の想像力の産物なのに「無許可だ」と非難されても、どうしようもない。自分の車線をはみ出して害をなしたという攻撃を防ぐ術がない。

2017年に画家ダナ・シュッツが、白人に虐殺された黒人少年エメット・ティルの潰れた顔を描いた「開いた棺桶」という作品<sup>2</sup>をホイットニー美術館で展示したときに巻き起こった抗議の声は、シュッツに「自分の車線からはみ出るな」という警告だった。これは最もとげとげしい文化盗用に関する事件だった。画家のハンナ・ブラックはシュッツの絵画を廃棄せよという緊急遺言を送り、次のような公開書簡を発表した。「エメットの母親は仲間の黒人へのメッセージとして棺桶を開いたまま葬式を行った。黒人でない人間はこの黒人の心情を理解できないし、表現することもできないことを認めるべきである・・・」これに対しシュッツは、自分の車線に留まるという同じ論理で答弁した。「米国で黒人であることがどんなことであるかは、私は理解できません」と認め、次のように書いた。

でも、母親としての気持ちは理解できます。エメットはマミー・ティルの一人息子でした。自分の息子がひどい目に遭ったときの母親の気持ちは、子どもがない人には理解できないでしょう。子どもの痛みは自分の痛みなのです。私が開いた棺桶を描いたのはエメットの母親の思いへの共感からです…芸術は共感の場、繋がり媒体です。人は他者の気持ちを完全には分からないかもしれない(私には黒人の親たちがエメット虐殺に抱く恐怖を分からないかもしれない)けれど、お互いに全然理解も共感もできないということはないでしょう。

シュッツは自分とマミー・ティル＝モブリーが母親という点で共有する車線は人種車線に劣らず重要であると主張したのである。

同じような主張を、政治学者アドルフ・リードが、黒人米国人と白人米国人の歴史が絡み合っている様を明らかにした論文の中で述べている。「米国人のシュッツは(英国生まれの)ブラックよりティル一家の不幸を強く感じ取っていると見てよい。人種差別は米国南部の支配的体制で、それとの闘いと並んで米国社会と歴史を構成している。それがエメット事件に大きな社会的・政治的意味を与える米国独特の経験を表現する歴史的瞬間なのだから」と、彼は書いた。

ティル＝モブリーが潰された息子の死体を開いた棺桶で展示して権力者に挑戦したのは、このイメージを仲間の黒人に伝えるためではなかった。「私が見たものをみんなに見てもらいたい。全国民がそれを見るべきです」と彼女は言った。彼女と共著で『罪なき人の死：アメリカを変えたヘイト・クライムの物語』(*Death of Innocence: The Story of the Hate Crime that Changed America*)を書いた作家のクリストファー・ベンソンは、「テ

イル＝モブリーは人種の如何を問わず多くの作家や芸術家が息子のことを表現して多くの人々に大きな影響を与えるのを歓迎した。ボブ・ディランの唄『エメット・ティルのバラッド』(*Ballad of Emmett Till*)、ピューリッツァー賞受賞詩人グウェンドリン・ブルックスの詩『エメット・ティルのバラッドの最後の四行詩』(*The Last Quatrain of the Ballad of Emmett Till*)、黒人作家ジェームズ・ボールドウィンの戯曲『ミスター・チャーリーのためのブルース』(*Blues for Mister Charlie*)、女流作家ベベ・ムーア・キャンベルの小説『あなたのブルースは私のブルースとは違う』(*Your Blues Aint like Mine*)、脚本家ロッド・サーリングが「トワイライト・ゾーン」などのテレビ番組でいろいろに解釈してエメット虐殺を取り上げたことなど、多くの作品がある」と書いた。

従って、文化盗用を論ずる場合、作家は車線共有を証明したときにのみ他者のことを描く許可が与えられるというような議論は、まったく意味がない。何らかの形で車線は共有されているものである。大切なことは、芸術家や作家は共通の人間性に基づいて他者の世界へ豊かに想像力を働かせることである。

共通の人間性 — この言葉をタイプしたとき、古風で時代錯誤な感じがした。しかし、この観念の尊厳と威信を復活させることが現代の左翼の任務の一つではないかと、私は思う。

フィクションの世界 — 私に馴染んでいる芸術領域 — では他者の人生を想像することが仕事の一部である。哲学者で小説家のアイリス・マードックは「小説家の偉大さは他者に関する理解の質の高さによって判定される」と書いた。トルストイが多くのことから最高の小説家と評価されているのは、文章の美しさとかプロットの巧みさなどのためでなく、初めて舞踏会に出る娘、死の床の老人、キツネ狩りに出かける貴族、その貴族の乗馬姿を見送る農奴など、様々な人間に命を吹き込んでいるからである。トルストイが生きとし生けるものを見事に描き出しているために、読者は自分たちの生を深く意識するようになるのである。彼が他者を理解し見事に描いているために、読者は自分以外の世界への認識を深めることができるのである。

トルストイと同世代の英国の作家ジョージ・エリオット（本名メアリー・アン・エヴァンスという女性）は他者の心情に想像力を働かせることは一種の道徳的必要だと明言した。小説『ミドルマーチ』でエリオットは、カソボンという名の活気のない学者と結婚しようとしているドロシア・ブルックという元気な若い女性を描いている。ドロシアはカソボンを知的で人間性豊かな男だと無邪気に思っている。しかし周囲の人たちは彼女が盲目にも薄情でユーモアのかけらもない心の狭い男と結婚しようとしていると見ている。

小説の75頁あたりでエリオットは注目すべきことを行っている。小説の進行を一時止めて、カソボンに関する周囲は分かったが、カソボン自身は自分をどう思っているのだろうと書いている。

一人の男に対する外側の評価から目を転じて、その男自身が自分の営為や能力をどの

ように意識しているのかに、もっと関心を向けてみてはどうだろう。どんな困難を抱えて日常活動を行っているのか、年月の経過がどのような幻滅、あるいは反対にどのような自己妄想を彼の心の中に刻み込んでいるのか、世間の圧力、いつの日か彼の心を折ってしまうかもしれない世間の圧力とどのように闘っているのか、などを考えてみたらどうだろう。おそらく彼だって自分のこと、自分の運命を大切に思っているだろう。彼が私たちに厚かましくも過大な評価を求めている、と私たちが思うのは、むしろ私たちの方に彼のことを考える余地が欠けているためではなかろうか…カソボン氏もまた彼の世界では自分が中心なのである…。

私が知る限りこの引用部分は小説家の信条を最も美しく表現する文章である。誰もが世界の中心なのだ。小説家の仕事はこの真理を尊重することで、それをする方法の一つが想像で他者の人生を生きることなのだ。

この考え方に反対するよく耳にする議論は、白人作家が他者の人生を想像する自由を長い間独占してきたこと、そしてその自由を濫用して他者の不正確で屈辱的なイメージを作りだしてきたこと、それ故白人作家は出しゃばらずに「自分の車線」に留まることが大切である、という議論である。白人作家には沈黙という集団的懲罰が勧告されるのである。パキスタンの女性小説家カミラ・シャムニーはこの議論を熟考して次のように反応した。

作家は他者のことを書けないという考え方には大変危険な面がある。19世紀～20世紀の英帝国の小説では、南アジア人が恐るべきステレオタイプで描かれてきたが、それを嫌というほど見てきた南アジア人としての私は、権力と関わる作家がその権力構造を擁護し、支え、正当化する小説を書いてきたという批判に反対するつもりがないのは確かだ。自分のことを他人が余りにも長きにわたって表現してきたと感じる人々の懸念はよく理解できる。しかし、これに対しては白人作家に書くなと要求するのでなく、異なる形で、もっときちんと書けと要求すべきではないだろうか…

アメリカ人男性はパキスタン人女性について文章を書けないと言った瞬間、パキスタン女性を小説に書くなと言ったことになる。もっと悪く言えば、アメリカ人男性はパキスタン女性を理解できない、パキスタン女性は謎で、測り知れなく、不可知、つまり他者だと言うことになる。彼女や彼女の国の人のことは他者としてそっとしておけと言うことになる。

自分の「アイデンティティ・グループ」の外の人間の視点でものを書くのは容認できないという意見はよく耳にするが、批評家や評論家たちはもう少し柔軟な姿勢で一致しているようである。彼らは、小説家には他者の内面生活を想像して描く自由があるが、その自由は「責任をもって」行使すべきだというのである。

ある面では妥当な意見である。敬虔なムスリムを描いた作品で、主人公が仕事から帰っ

てきて台所でポークチャップを料理する場面があったら、その作家にもっとイスラムを勉強し、もっと「責任をもって」テーマにアプローチせよと批判するのは当然であろう<sup>3</sup>。しかし、よく考えると、「責任をもって」書くというのは、場合によっては好ましくない意味合いを持つことがある。

ユダヤ系ロシア人短編小説家のイサーク・バーベリは作品のほとんどをスターリン政権以前に発表していた。スターリンの作家や知識人投獄・処刑が始まったとき、バーベリは沈黙して難を逃れようとした。スターリン政権への忠誠を示そうと努めたが、それでも独立心を抑えられないときがあった。1934年のモスクワ作家会議の席上で、バーベリは「党と政府は我々に多くを与えてくれたが、一つの権利を我々から奪った — 悪文を書く権利を。同志諸君、正直に見ようではないか。悪文を書くのも立派な権利で、それが無いのは大きな喪失です」と言った。

つまり、スターリンは作家から貴重なものを奪ったと言ったのだ。党を喜ばす「正しい」文章しか書けないというのは、作家に自由がないことだと指摘したのである。

作家には悪文を書く自由と同じように、無責任に文を書く自由も必要である。最良のフィクションは倫理的である — ジョージ・エリオットの共感（感情移入）によるフィクションという信条は私が知る限り最高の倫理的観念である — が、フィクションが無責任な遊びの世界との繋がりを失えば、作家は何も書けないことになる。

アーヤトッラー・ルーホッラー・ホメイニーが『悪魔の詩』を出版したことでサルマン・ラシュディに死刑宣告を出したことで、ラシュディに連帯を表明した作家や知識人はいたが、同時にラシュディに「責任をもって」書くべきだったと小言を言った人々もいた。この人たちは我知らずに迫害者側に立って、挑発的文学活動を行ったラシュディは自業自得だと言っているのである。他人を怒らせる権利、風刺する権利、場合によっては間違いを犯す権利も、それぞれ貴重な権利で、芸術や文化の愛好者は無条件でそれを認めなければならない。

誤解を招かないように言っておくが、私は文化盗用論を唱える人々がスターリンやホメイニーと同じ圧政者だと言っているのではない。芸術にはアナーキーなエネルギーがあり、それを尊重することが大切だと言っているのである。

ロシアの芸術プロデューサーのセルゲイ・ディアギレクが自分のバレエの台本を書いてくれとフランスの詩人ジャン・コクトーに依頼したとき、彼はややこしい注文をつけず、「私を驚かせてくれ」とだけ言った。現代の若い芸術家たちは「足元に用心しろ」というような警告ばかり受けている。

文化盗用論を振り回す批評家は芸術に対し清教徒的な見方をするように、文化に対しても清教徒的な見方をする。もう一度スーザン・スカフィーデイの定義を見てみよう。「他者の文化から知的財産、伝統的知識、文化的表現、工芸品などを許可なく使用すること。他文化に属するダンス、衣服、音楽、民間伝承、料理、伝統薬、宗教的シンボルなどの無許可使用も含む。」

文化盗用裁定者は他人の玩具を勝手に使ってはいけないと児童たちを厳しく叱る幼稚園の先生みたいに見える。しかし、盗用や借用なしでは文化は発展しない。食文化も音楽も、この論文で使っている言語も、すべて文化盗用から生まれたものである<sup>4</sup>。

この混合はかなり不平等な条件で進行したのは事実だが、すべてがそうであったわけではない。現在では、支配的文化が弱いマイノリティ文化から吸血鬼のように血を吸い取るという見方が、左派の間の主流である。しかし、もっと自信に溢れた社会運動の目で見れば、マイノリティ文化からの借用はマイノリティ大衆の創造性の豊かさを証明するものである。ラルフ・エリソンはアメリカの音楽と人種に関する本をレビューした文の中でそういう考え方を表明した。彼はブルースの起源を「政治的に無力な奴隷たちが音楽を通して巨大な権力を持つ社会に自分たちの価値観を投げかけたもの」と書いた。

60年前にエリソンが書いた多くのエッセイは、現在展開されている文化盗用議論にとって信頼できるガイドである。次に彼のエッセイ『チェバウ駅の小さな男』(*The Little Man at Chehaw Station*)からの抜粋を紹介する。

趣向、伝統、生活様式、価値観などが文化を構成するが、歴史的にその文化と無縁なグループや人々がそれらの要素を絶えず借用して自分のものにする営為 — 意識的に、まったく人目を気にしないで、または帝国主義的に — は…文化次元で行われてきた。まさにこの文化借用（及び横領）を通じて、英国人、欧州人、アフリカ人、アジア人がアメリカ人となったのである。

ピルグリムたちは先住アメリカ・インディアンの農業、軍事、気象に関する伝承をそれを表現する言葉といっしょに盗用した。部族を破壊されて奴隷として連れて来られたアフリカ人たちは英語と古代ヘブライの聖書伝統を採用し、アメリカ独立戦争よりずっと前に「アメリカ化」していた……。

みんなが盗用・借用ゲームを行った…そのプラグマティックで日和見主義的な文化盗用によって自己確立を促進させ、それこそが自由の一つであるとアメリカ人は本能的に感じ取っていたようである…この国ではすべてが絶えず大動揺していて、人々は絶えず動き回り、お互いに文化的感染し合ってきたのである。

エリソンの友人で戦友でもあったアルバート・マレイも同じような考えであった。彼は「アメリカ文化は、最も差別と隔離が厳しい地方でも、多文化合成であることは明確で決定的である…いわゆる黒いアメリカ人といわゆる白いアメリカ人は、伝統的にはっきり敵対する異種同士であるにもかかわらず、世界では珍しいほどよく似ている」と書いた。

エリソンやマレイの本を読んだ後では、現在の文化盗用談話を発する批評家たちは何か奇妙な純血主義カルトの信者のように見えてくる。生活の中で避けることができない他者との接触と混合を戒め禁止する狂信的カルト指導者のように見える。

こういう私の見解と反対の立場の優れた人物と作品を紹介しよう。ローレン・ミシェ

ル・ジャクソンの雄弁で生き活きた『白いニグロ：コーンロー髪型の流行とその他の文化盗用に関する考察』(*White Negroes: When Cornrows Were in Vogue...And Other Thoughts on Cultural Appropriation*)である。機知に富み、生き活きた文体のこの作品は、初めのうちはエリソンやマレイと同じような観察を提示している。「盗用はどこでもあり、避けることは出来ない…芸術・文化的慣行の真似をアウトサイダーに禁ずるという発想は、特に現代のようなインターネットの時代では、ばかげている」と書いている。このように芸術・文化の混ざり合いを歓迎する一方で、黒人文化の影響を受けた白人アーティストの例の考察では、それは悪い結果をもたらすと考えているようである。「権力側に位置する者が被抑圧者の側から盗用すると、社会的不均衡がいつそう悪化し、不平等状態がますます長引くことになる。白人は『食いしん坊のカバのモモちゃん』<sup>5</sup>のように力を蓄えている。白人による悪しき盗用の歴史は、先住民の土地と作物の奪い取り、次いでアフリカ人を奴隷労働として収用することから始まった。この伝統は今も続いている。黒人が日銭稼ぎや手慰みで製作したものを、白人の会社や個人がタダ同然に盗用して、商品化する」と書いている。

ジャクソンが書いているように、文化的混じり合いは呼吸のように自然で必然的なもので、それ自体は彼女が非難した不平等の原因とはならない。原因は他にある。

歴史家バーバラ J. フィールドの意見を紹介する。

誰も彼もが複数文化の上で、同時的に、重複しながら、生活している。ミュージシャンのチャック・ベリーやエルヴィス・プレスリーもそうだったし、現代の我々もそうである。みんなは私的経験を超える一つの歴史を共有し、その歴史が産み出す文化を共有しているのだ。

しかし、他の人より財産や所得が多い人、豪華な家、高い教育、健康で長生きする人がいるように、政治的立場や経済的立場の違いから、その共有文化を収益化して栄える人が生じる。しかし、それは文化盗用の結果ではなく、政治的・経済的搾取から生まれるのだ…従って、それを正す方法は文化行動に対する警察行為ではなく、政治的行動である。

芸術家や芸能人を被差別者の文化を盗むと非難しながら、同じことを我々みんな — ローレン・ミシェル・ジャクソンやこの論文を読むような人も含めて — が行っている事実を目を閉じているのは、まったくナンセンスである。グローバル資本主義経済の中では、我々が買ったり、使ったり、着たり、食べたりするものはすべて、どこか遠くの場所で権利を剥奪された労働者の手によって作り出されたものである。

だから、「自分の車線から出るな」という方針は進むべき道ではない（それは、自分が製作しない服や電話を使うな、自分で生産しない食物を食べるなど言うのに等しい）。進むべき道は、所得上位1%を構成しない人々（我々）が連携して、不公平や不平等に終止

符を打つことである。

文化盗用談話を読めば読むほど、車線への執着は一種のペテン政治だという結論に反対できなくなる。文化盗用論者は自分なりに大切な政治活動のつもりでやっているのだろうが、彼らの攻撃の対象となる人々は比較的社会的権力が弱い人々 — ヨガ教室インストラクター、ブリト屋台を出した女性、視覚芸術家、車線を越える冒険を試みる小説家 — である。社会の不当な支配層に向けられているようには見えない。権力者が批判の対象になった例が少ないからである。

エルヴィス・プレスリー、パーソナリティのキム・カードシャム、作家のジャニーン・カミングスなど人気アーティストや有名人が対象になることもなるが、彼ら芸能人を不正な社会的権力層を構成すると見るのは現実離れしている。

2013年、アーケイド・ファイアというバンドがハイチ音楽の影響が濃厚な『リフレクトー』というアルバムを発表したとき、少しの間ネットが文化盗用議論で騒がしくなったことがある。大騒動ではなかったが、雑誌『アトランティック』が取り上げたほどの事件であった。(結局、批判者たちの多くはバンドの言い分に納得した。リーダーのウィン・バトラーが長年ハイチ音楽に没頭してきたこと、彼の妻でバンド仲間のレジーヌ・シヤサーニュがハイチ出身者だったからである)

2009年、ハイチ議会は全国最低賃金を時給61セントに引き上げる決定をした。とたんに米国国務省と並んで外国企業が反対の大合唱、あらゆる圧力を行使してハイチの紡績労働者の最低賃金を時給31セントに引き下げた。これは日給2ドル50セントになる。ハイチでは3人家族世帯の生活費が一日12ドル50セントであるが、それに満たない低賃金であった。地上最強の国の最強の企業の圧力でハイチの人々の貧困が強化されているのだ。リーバイ・ストラウスやバイデンなどの企業で、そのCEOの当時の年間報酬は約1千万ドルであった。この事件についてネット上で騒がれた形跡はない。フェイスブックやツイッターを丹念に調べても、まったくなかった。ようやく2011年になって、ウィキリークスと『ザ・ネーション』が取り上げたぐらいであった。

2017年、ブリト屋台を出した二人のポートランドの女性がメキシコ文化の盗用だとネットで猛攻撃されて店を閉じた。その翌年、グッドイヤー・タイヤ&ラバー・カンパニーは、メキシコのサン・ルイス・ポトシ州の自社工場で労働組合を作ろうとした労働者数十人を解雇した。このメキシコ人弾圧に対する第三者からの抗議や怒りはネット上で見られなかった。

ハイチやメキシコの労働者を抑圧する力は、米国を含む世界の国々の労働者を抑圧するのと同じ力であるのは、言うまでもない。米国では労働者の権利と社会福祉に対する資本の攻撃は年々強化されている。これこそが本当の盗用である — 人々の生活向上の機会を盗み取ること、余暇と健康と安全への機会を奪い取ること、公平な地方開発の可能性を潰すことである。女性がブリト屋台を出すこと、ミュージシャンがマイノリティ音楽を取り入れること、白人モデルがジャマイカ風のドレッド・パーマをかけること、作家が他者の



生活に想像力を働かせて創作することは悪いことではない。悪いのは人々から奪い、抑圧し、傷つける企業の行為である。

時々私は我々に特別な感性が備わっていればよいのに、と思うことがある。我々みんなが結びついていることを感じ取る感性のことだ。シャツを着るとそれを製作したニカラグアの衣服労働者の苦勞を感じ取る感性、電話を使うとバッテリー用のコバルトを採取するコンゴ民主主義共和国の児童労働を思う感性、オレンジの皮を剥くときフロリダでオレンジ摘み取りで汗を流す移民農業労働者のことを思う感性である。

そのような感性が十分に備わっていないので、我々には共感を呼び起こす想像力を開発する必要があるのだ。他者の生活を想像することが必要なのだ。

アーティストが他者の生活や文化を表現しようとするのは害にならないので大目に見てやれと言っているのではない。そんなちやちなことでなく、他者の生活を想像することは世界を人間らしい社会にするために絶対必要だと強く主張しているのだ。

所属集団が異なれば共通するものがないという文化的唯我論を採用することもできれば、我々の生活はまだ見たこともない人々の生活と密接に繋がっていることを理解することもできる。お互いに貸し借りがある存在であることを否定する考えもあれば、普遍的人間性というビジョンを復活させようという努力もある。自分の車線に留まる生き方を倫理的と唱える人もいれば、他者との連帯を説く人もいる。この連帯という古い考え方こそ、自由と平等を求める人々にとって、最高の価値であり、理想である。

---

## 訳注

- 1 出版前の原稿に問題になるような言葉遣いや表現がないかどうかを検閲する人。
- 2 白人女性に口笛を吹いたというだけで目玉をくり抜かれるなどの残虐な殺され方をした少年エメット・ティルの虐殺を世に訴えるために、エメットの母親が棺桶を開いたままで葬式を行った。シュッツはそれを **Open Casket** という題で絵に描いた。
- 3 ムスリムは豚肉を食べない。
- 4 英語は世界一の混血言語である。
- 5 子どもの絵本やおもちゃに登場するカバ。